

駿河湾久連地先におけるオサガニヤドリガイの分布記録

早瀬 善正¹・上野 信平²・松永 育之¹・社家間 太郎¹

¹〒424-0023 静岡市清水区八坂北1-10-12 (株)東海アクアノーツ

²〒424-8610 静岡市清水区折戸3-20-1 東海大学海洋学部

オサガニヤドリガイは香港 (Tolo Harbour, Hoi Sing Wan) を模式産地とし、記載されたオサガニ類に着生する小型二枚貝である (Morton & Scott, 1989)。国内では小菅・伊谷 (1994)、名和 (2001)、小菅 (2005) による西表島・石垣島での分布が報告されたが、八重山列島その他、近年は沖縄本島各地 (久保, 2005) から生息が知られている。著者らは2002年12月、沼津市久連地先 (図1) の造礁サンゴ、エダミドリイシの群集に隣接して存在する小規模なアマモ場周辺で採取したベントス試料に本種の生貝を確認した。さらに、2004年10月、2005年4月の砂泥サンプル内からも、本種の死殻を確認したが、本種は、これまでに本州での分布記録のない種であるので、ここに報告する。

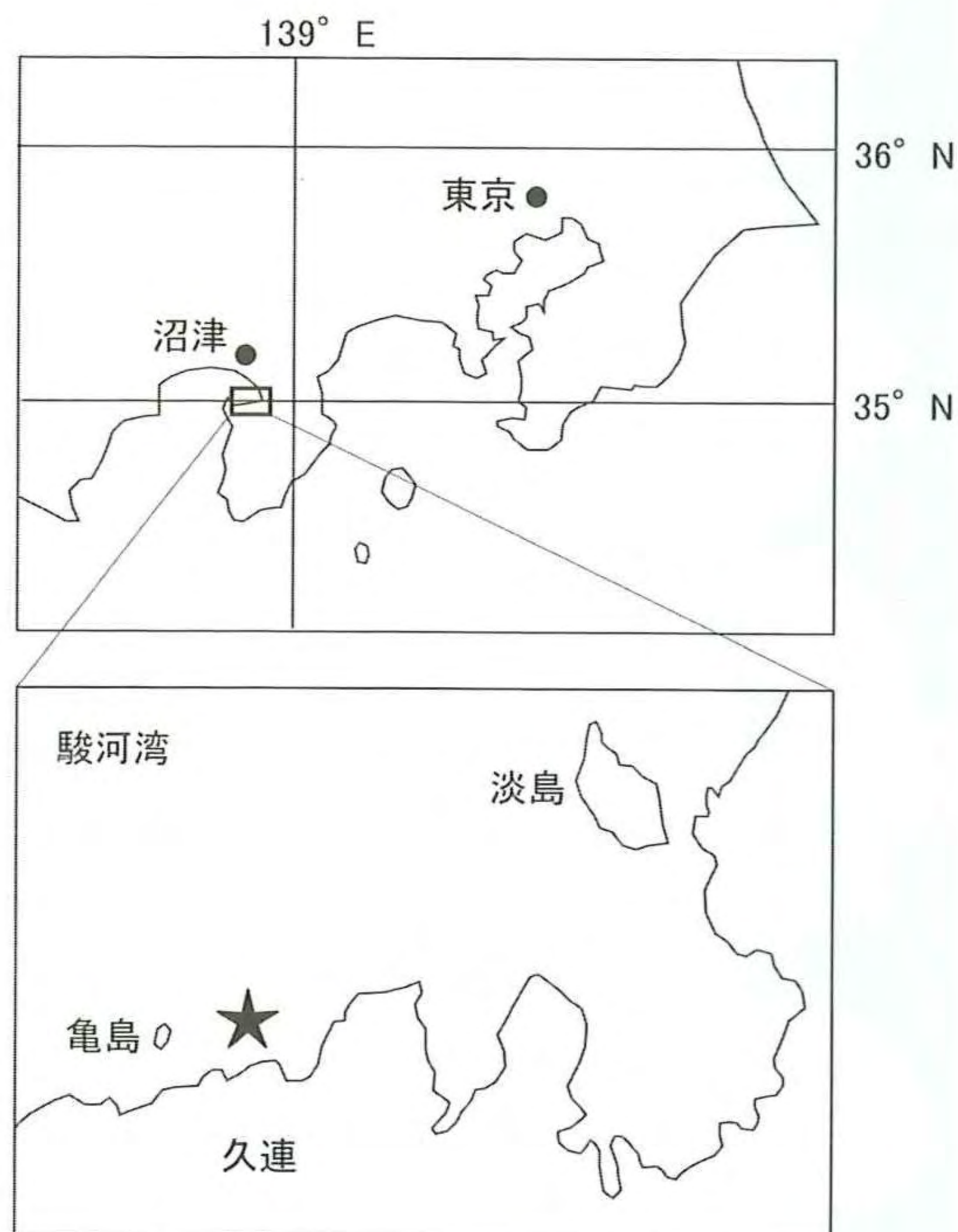


図1. 駿河湾での調査地点. 調査地点を★印で示した.

Class Bivalvia Linnaeus, 1758 二枚貝綱

Order Veneroida H. & A. Adams, 1856 マルスダレガイ目

Superfamily Galeommatacea Gray, 1840 ウロコガイ超科

Family Lasaeidae Gray, 1847 チリハギガイ科

Pseudopythina macrophthalmensis Morton & Scott, 1989 オサガニヤドリガイ
(図2A-D)

Yoshimasa Hayase, Shinpei Ueno, Yasuyuki Matsunaga & Taro Shakema. 2009. New distribution record of *Pseudopythina macrophthalmensis* Morton & Scott, 1989 from northern part of Suruga Bay, Kuzura, Numazu City, Shizuoka Prefecture, central Japan. *Chiribotan* 40(1): 15-19.



図2. A-D. オサガニヤドリガイ. E. オサガニヤドリガイ. F. メナガオサガニ. G-H. オサガニヤドリガイの付着状態. I. タテヨコイトカケ. J. カシパンヤドリニナ. ヨツアナカシパンに寄生. K. ガンガゼヤドリニナ (雄). L. ガンガゼヤドリニナ (雌). M. クロスジグルマ. N. ウミヒメカノコ. O. モロハボラ. P-Q. オマセムシロ. R. オウギウロコガイ. S. ハツユキダカラ. T. オミナエシダカラ. A-D, F-T. 沼津市久連産, E. 西表島船浦産.

検討個体：生貝2個体，死殻（右殻：9，左殻：20）

採集日：2002年8月17日，12月15日，2004年10月23日，2005年4月17・23日

調査地：静岡県沼津市久連（くづら）地先（駿河湾奥）

特徴：最大個体は殻高2.6mm，殻長3.2mmであり，小型。丸みを帯びた三角形状の形態。色彩は茶褐色のみの個体，殻頂部からハの字状に濃い茶褐色で彩色され，その付近が白色になる個体など色彩変異が見られる。外套線は湾入しない。検討試料とした沖縄本島羽地内海産の個体や西表島船浦産の個体（図2E）とは色彩，形態ともに差異は認められない。

生息環境：Morton & Scott (1989) では潮間帯砂泥底に生息する *Macrophthalmus* (*Venitus*) *latreillei* (Desmarest, 1822) ノコバオサガニの主に甲の側縁に多数の個体が付着する1例のみが確認され，小菅・伊谷 (1994) では，西表島船浦や仲間川の干潟の *M. (M.) convexus* Stimpson, 1898 フタバオサガニに付着する多数の個体が確認されている。小菅 (2005) では，石垣島の *M. (M.) milloti* Crosnier, 1965 ミナミメナガオサガニ，*M. (M.) brevis* (Herbst, 1804) ミナミオサガニへの着生が知られる他，名和 (2009) では，沖縄本島の低潮帯，粗砂底，メナガオサガニ（近年の研究報告より，ミナミメナガオサガニなどであると思われる。）に付着との記録が見られる。さらに著者らは，沖縄本島羽地内海産のフタバオサガニに付着する個体を確認しているが，当海域の生貝については同地の水深4mの砂泥底で採取された *M. (M.) serenei* Takeda & Komai, 1991 メナガオサガニ（図2F）の脚や体表上に一本の細長い足糸によって付着していた2個体のみであった（図2G-H）。死殻は水深3～5mで海草の *Zostera marina* Linnaeus, 1753 アマモや *Halophila ovalis* (R. Brown) Hooker, 1858 ウミヒルモの生育する周辺の砂泥中より確認した。尚，2004年10月に1個体採取された *M. (M.) microfylacas* Nagai, Watanabe & Naruse, 2006 ヒメメナガオサガニの雌個体には着生がみられなかった。

随伴種：これまでに，調査海域周辺には本種のほかに寄生や餌料とするために，他の無脊椎動物に対しての依存度が高い *Epitonium* (*Parviscala*) *eusculptum* (Sowerby, 1903) タテヨコイトカケ（図2-I），*Melanella peronellicola* (Kuroda & Habe, 1950) カシパンヤドリニナ（図2-J），*Echineulima robusta* (Pease, 1860) ガンガゼヤドリニナ（図2K-L），*Architectonica perspectiva* (Linnaeus, 1758) クロスジグルマ（図2M）などの種が確認されている他，*Smaragdia* sp. ウミヒメカノコ（図2N），*Aspella anceps* (Lamarck, 1818) モロハボラ（図2O），*Reticunassa praematurus* Kuroda & Habe, 1960 オマセムシロ（図2P-Q），*Galeommella utinomii* Habe, 1958 オウギウロコガイ（図2R）等の特徴的な希少種が確認されている。さらに，オサガニヤドリガイ同様，亜熱帯～熱帯域に分布の中心を示すタカラガイ科 Cypraeidae の種には，*Cypraea* (*Erosaria*) *erosa* Linnaeus, 1758 ハツユキダカラ（図2S），*Cypraea* (*Erosaria*) *boivinii* Kiener, 1843 オミナエシダカラ（図2T）などの種も生息確認されている。

考察：これまでにオサガニヤドリガイの国内における分布は西表島から沖縄本島までの琉球列島の亜熱帯域で知られていたが，本報告により，北限が温帯域の駿河湾奥まで大きく広がった。従来の分布から大きく外れることから，種の同定に関する疑問が考えられるが，西表産や沖縄本島産の個体と同様にオサガニ類に着生する生態的特徴や，比較した西表島産の個体（図2E）にも確認される殻頂部からハの字状に濃い茶褐色で彩色される特有の殻の色彩的特徴に差異はなく同種であると考えられる。本海域は，日本周辺では主に本州

中部に分布する造礁サンゴ，エダミドリイシ *Acropora tumida* Verrill, 1866 の卓越した群集が形成されており，造礁サンゴの世界的な分布の北限域にあたる。しかし，冬季の月平均水温の最低は2月～3月で14.6～14.8℃（上野，1996）に低下し，1～5月までの5ヶ月は，サンゴ礁の形成される最低水温18℃を下回る（上野，2000）ことから，造礁サンゴをはじめとする熱帯～亜熱帯系の生物にとってはきわめて厳しい水温環境下にあたる。したがって，オサガニヤドリガイにとっても，これまでに知られるインド，西太平洋の亜熱帯，熱帯域の分布域（小菅・伊谷，1994）から考えられる水温などの非生物的環境の条件は，かろうじて満たしている程度で，きわめて厳しい生息環境であることが推察される。本報告により沖縄本島から直線距離で約1400kmも分布範囲が広がったが，本種がこのように広範囲に分布する理由として浮遊幼生の黒潮による分布の拡散が考えられる。しかし，単年生（小菅，2005）で季節的な消長が激しい（久保，2005）とされることや，2002年以後，生貝の確認がないことから，温帯域の当海域で確認された本種の個体群の維持機能が，永続的に続くことは難しいことが推察され，一時的な定着に過ぎなかったのではないかと考えられる。

謝辞：西表島船浦湾の試料を提供して頂いた姫路市立水族館館長の市川憲平氏，西表島産の個体の生息状況について助言を頂いた姫路市立水族館の増田 修氏，メナガオサガニ類の同定および学名について等，多くのご教示を頂いた東海大学沖縄地域研究センターの小菅丈治氏，（株）ツドイカンパニーの前之園唯史氏，助言を頂き文献の渉猟にあたりお世話になった他，試料の一部を同定して頂いた木村昭一氏，河辺訓受氏，本研究の遂行にあたり便宜をはかって頂いた沼津市内浦漁業協同組合，調査に協力頂き，試料の一部を提供して頂いた宮崎 勤氏，沖縄本島産の個体についての写真資料などを提供して頂いた安仁屋政高氏，本報の作成にあたり，調査および資料作成の協力を頂いた（株）東海アクアノーツの高橋信彦氏，跡辺隆行氏，舟越善隆氏の各位に謝意を表す。

尚，著者の一人，東海大学海洋学部教授，上野信平（前海洋学部長，水産学博士）は，本稿作成途中の2009年2月6日に逝去された。門下生である残る著者一同，これまでの調査・研究指導および助言に対して謝意を申し上げますと共に深く哀悼の意を表す。

引用文献

- 小菅丈治・伊谷 玄. 1994. オサガニ類に着生する二枚貝オサガニヤドリガイ（新称）の西表島からの記録. *Venus* 53(3): 241-244.
- 小菅丈治. 2005. 石垣島におけるミナミメナガオサガニに着生するオサガニヤドリガイの個体数と殻長組成の季節変化. *沖縄生物学会誌* 43: 21-25.
- 久保弘文. 2005. オサガニヤドリガイ. *In*: 沖縄県文化環境部自然保護課（編）改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物動物編レッドデータおきなわ. pp. 483-484. 沖縄県文化環境部自然保護課，那覇.
- Morton, B. & Scott, P. H. 1989. The Hong Kong Galeommatacea (Mollusca : Bivalvia) and their hosts, with descriptions of new species. *Asian Marine Biology* 6 : 129-160.
- 名和 純. 2001. 琉球列島における内湾干潟の貝類相. *WWF Japan Science Report* 4:

1-44.

名和 純. 2009. 琉球列島の干潟貝類相(2) 沖縄および宮古・八重山諸島. 西宮市貝類館
研究報告 (5): 1-81, figs. 1-33, pls. 1-20, tabs. 1-3.

上野信平. 1996. 海洋生物 4 駿河湾の造礁サンゴ. *In*: 東海大学海洋学部 (編) 新版駿
河湾の自然. pp. 149-157. 静岡新聞社, 静岡.

上野信平. 2000. 駿河湾のエダミドリイシ群集. *In*: 月刊海洋(編). ベントス研究—近年
の動向. 月刊海洋 32 (10): 682-686. 海洋出版株式会社, 東京.

[2009年4月19日受理]